

流山稲門会

【交譲葉】俳句の会 報告

令和七年三月句会(第一五四回)

兼題 「水温む」

催日 令和七年三月二十二日

開催場所 生涯学習センター

出席者 六名

投句者・選句者 七名

(二点句)

ツーツーツと小鳥もダンス水温む 小牧  
 相馬川稚魚の放流水温む 夢心  
 せわしなや蜜吸う目白の身のよじれ 寿歩  
 春燈やミュージアムの絵さらに佳し 徹心  
 川野辺に蓬摘む子の賑わいや 艸寛  
 雛祭り雪ひとしきり降りにつけり 夢心

(一点句)

水鳥の嘴濡れ光る水温む 寿歩  
 水温み水垢離行者も微笑みぬ 徹心  
 水温む小鮎の群れはどこ向かう 艸寛  
 山焼きと山火事の差は悲しけれ 小牧  
 またひとつお濛にはもん水温む 寿歩  
 世界には花の咲かない春も有り 互酬  
 水温む田んぼ覗けば数多の子 艸寛

(投句)

頭搔き推敲重ね水温む 互酬  
 水温むドンキホーテの盾と槍 玄鳥  
 神棚に宝くじ載せ春願う 互酬  
 春燈下引きこもり人もにこやかに 徹心  
 春陽浴び午後の授業はこつくりと 艸寛  
 春の山ながれながれて流山 玄鳥  
 日を重ね思ふこと多き夜半の春 小牧  
 春の雪雨に変わって消えにけり 夢心  
 役職と縁のなき身や鳥帰る 玄鳥  
 水温み池の鯉たち大はしやぎ 徹心  
 猫の恋昔の手紙読みかへす 玄鳥

『句会後記』

ほとんど夏日に近い気温のよく晴れた、兼題の「水温む」が実感できるような一日、玄鳥氏欠席の9名での句会となりました。まずは作句の背景や作者の意図の説明があり、選者の選句の理由、その他の会員からの感想を出し合うという形で句会が進んでいきます。詠み手の意図と読み手の受け取り方の思いがけない違いが見つかるのも面白いところですね。それだけに今回は欠席された方からの作者の話が聞けなかったのは心残りでした。

句会の最後に、このところずっと会員が七名で推移しているが何とか増やせないものかという話がありました。明日の稲門会総会の席で勧誘することでしたが、仲間が増えることを期待したいものです。(夢心記)

(五点句)

●菜の花や高さ揃わぬ列をなし 夢心  
 選評：菜の花を黄色の広がりではなく、高さと列の二方向で捉えたことが新鮮でした。さらに、否定の揃いから肯定の整列への転換に、意表を突かれました。公園のフェンスに沿って植えられた菜の花の様子とのこと。目に留まったことを観察し、その発見を気負いなく詠み、映像が見て、リズムもよく、とても良い句と感心しました。(寿歩記)

(四点句)

●身をねじり天こがれ咲く臥龍梅 寿歩  
 選評：春を告げる花木と言ったら古から梅と言われてきました。紅白梅、蠟梅、しだれ梅、寒梅等多々呼び名はありますが、作者は「臥龍梅」を下の句に持つてきてどんと季語に重みをもたせました。最初から「ねじり・こがれ」とたたみ掛けて自分も天に昇っていきたいという強い願望も感じられます。句の調べも良く秀句に値します。

(互酬記)

●絵手紙に色濃く描く露の臺 互酬

選評：露の臺は露の若い花茎で花が開かない前の苞葉に包まれている。特有の香りと苦みがあり、古来より日本人は食用としている。その露の臺を、作者は絵手紙の主題として色鉛筆で描くのであるが、敢えて存在感を強調するために濃いめの色遣いをしたのであろうか。対象物である露の臺を描く一つのテクニクとして賛同できるし、それを俳句のテーマにしたことのユニークさを評価した。

(徹心記)

(三点句) 小牧  
 安曇野に水車回りに水温む